里　山　と　鳥　類

農業環境技術研究所　守　山　　弘

COPPICE WOODS AS THE STEPPING STONES FOR THE WINTER VISITING MONTANE BIRDS

Hiroshi MORIYAMA　*National Institute of Agro-Environmental Sciences.*

わが国の農村は肥料（落葉）・燃料を里山から採集しており，その必要量から土地面積の１／３～１／４に相当する二次林（里山）を保持していた。二次林は関東では台地上に散在し，冬に山から鳥が降りてくる時の飛石の役目をしていた。東京ではキツツキ・ヒガラ・ヤマガラ・ゴジュウカラ・マヒワ・イスカ・ウソ・キクイタダキ・ルリビタキなどが1820年代には上野・四谷・目黒を結ぶ地域にみられ，1930年代には板橋・杉並・三鷹・深大寺を結ぶ地域にみられた。いずれもその時代の農村と都市の接点にあたる地域である。

つくば市においても1960年代には二次林面積は上記の範囲に納まっていたが，学園都市建設により減少した。そこで山の鳥の供給源である筑波山，そこから農村を通り都市と出会う接点の林，都市の林，都市を通り抜けた地域の林の鳥相を比較し，山からの鳥の移動を検討してみた。山の鳥は筑波山を離れるにしたがって種数が減少していた。また都市公園の鳥相は都市を通り抜けた地域にある林のそれに比べ，クロジ・ミソサザイ・ヒガラ・ヤマシギ・トラツグミなどが欠如していた。公園に藪，林床に落葉が堆積した暗い林，雑木林・アカマツ林などが欠如しているためと思われる。

里山の鳥は他の樹林に種子を供給する役割も持っている。この地域では屋敷林から二次林へ多くの種子が鳥によって供給されていった。鳥類の多様性はさまざまな空間で結実する植物の種子供給を保障する。ところが都市の林には面積の縮小，間隔の拡大，公園化による生物保持機能の低下などがみられ，特定の種以外の山の鳥の移動を阻止するフィルターブリッジの役割を持つと考えられる。これらは鳥による種子供給にも影響を与え，樹林地の植生を貧化させてしまう。以上のことから農村の二次林・屋敷林などを一定間隔で残すことが植生の種多様性を保障するうえでも必要だといえるだろう。